

映画『眩暈 VERTIGO』 奇跡のようだった撮影

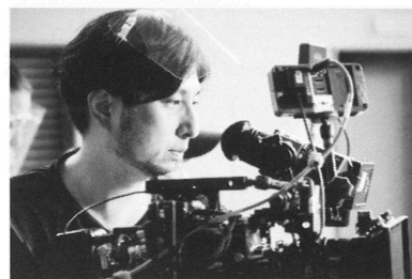
鈴木雅也 JSC
SUZUKI MASAYA

映画『眩暈 VERTIGO』は、日本の現代詩の先駆者である吉増剛造氏が盟友だった故ジョナス・メカス氏の幻影をマンハッタン、ブルックリンに追いかけて、言葉を紡いでいくドキュメンタリー映画で、追悼詩が劇的に誕生する様子が描かれています。メカス氏は前衛映画界のゴッドファーザーと呼ばれ、一周忌の2020年1月にニューヨークに私たちは向かいました。

渡航前の日本でも撮影をしています。東京ロケで使ったカメラは『SONY FS-7Mk II』。スーパー35センサーに『Canon 24-105mm T-4』の組み合わせは深度が浅過ぎず、レンズの画角にも幅がある、ドキュメンタリーではよく使われる定番の組み合わせです。一方、ニューヨークロケでのカメラは『SONY α 7s II』レンズは『Canon 24-70mm T-2.8』という組み合わせで撮影に臨みました。普段、映画やドラマを撮影している時とは違い、カットによって深度を大胆に変化させたいという狙いがあり、開放値の明るいレンズを選びました。人物の表情にフォーカスするクローズアップでは極端に背景と切り離すことができ、画角を最大まで広げマンハッタンビル群やブルックリンでの人々の生活を背景に言葉を探し続ける詩人を画に溶け込ませることができたと思います。吉増氏は絶えず詩のような言葉を呟く、と井上春生監督から聞いていたので現場移動中の街中、地下鉄の中、イーストリバーの船と撮影時間は膨大なものになりました。吉増氏がメカス氏の息子のセバスチャンに追悼詩を読み、沈黙してしまうシーンは30分の長回しをしています。

この映画は、メカスがリトアニアから亡命を果た

し、移り住んだニューヨークを舞台に吉増氏の目的地へ、歩みを追体験できる作品になっています。



鈴木雅也

ます。朗読のお願いを快く受けてくれた人たちを数々撮りましたが、肌の色、目の色、そしてイントネーションが様々でメカスのようで、この国は移民の国なのだという実感を持ちました。帰国して以降、新型コロナウイルスが世界中に広まりました。帰国の翌週にはWHOが『国際的な緊急事態』と宣言、3月22日になるとニューヨーク州は外出制限を開始。映画の中でも救急車のサイレン音が遠くに聞こえますが、はからずもパンデミック直前の街の様子も捉えた貴重な作品にもなっており、ラッシュを見るたびにあの奇跡のような撮影を思い出します。

監督：井上春生

録音：森英司

プロデューサー：山本礼二

2022年12月13日（火）より東京・恵比寿の「東京都写真美術館ホール」を皮切りに日本各地で順次公開予定。



吉増剛造さんとジョナス・メカスの子セバスチャン